

■福井大学 教育学部 教員養成スタンダード その理念■

スタンダード (standard) という言葉は現在、基準や標準という意味で用いられることが多いです。スタンダードは、皆が目指すべき旗印となるもので、実践や活動の拠り所となるものです。

福井大学教育学部の教員養成スタンダードは、本学部で教員免許状取得を目指す学生が、教師になるにあたって目指すべき目標と、その目標に向かって行われた学習の成果を評価するための基準を明確化したものです。このパンフレットに示された教員養成スタンダードには、新しい学校教育と教師、そして専門職としての教師の能力と学習の評価に関する大切な理念が埋め込まれています。

●新しい学校教育のデザインと教師

大人が自ら学び自ら考える力を発揮し、異なる考えの人々と対話し、激しい変化の中で方向性をしっかり定めて進んでいく。21世紀は、あらゆる重要な事柄が、すべての人が参加できる開かれた対話の空間において、その事柄に関心を共有する人々によって判断され遂行される時代になりつつあります。

これからの学校教育は教師だけが担っていくのではありません。また、学校だけが教育を担っていくのでもありません。教師、保護者、地域の市民、様々な専門職といった、まさに地域の教育に共通して関心を持つ人々が、関心の輪を創り出しながら連携し、地域が一体となって人づくりを支えていくのです。

ただし、このことは、これからの学校教育の役割が小さくなるということの意味しているわけではありません。学校教育は、すべての人に開かれた公教育を担う中心的な存在として、ますます重要になります。

このとき、学校教育を中心的に支える教師は、自ら学び自ら考える子どもを育てる探究的な授業やカリキュラムを日々デザインし実践すると同時に、地域社会と連携・協働しながら、教育に関する様々なネットワークの結び目を創り出していく存在としても活躍することが重要となります。これからの時代の教師には、まず、探究・実践と省察を繰り返し、生涯にわたって学び続けること、また、重要な事柄に関する深い理解の源泉となる学識を形成すること、さらに、同僚、保護者、地域の市民、他の専門職と連携し協働することが、その力量として求められるのです。

●福井大学教育学部の教員養成カリキュラムの特徴

このような力量を形成するために、福井大学教育学部における教員養成カリキュラムは、以下のような特徴を持って構成されています。

第一は、公教育の担い手としての教師を育てるという使命のもと、幅広い専門領域のスタッフが協働して学生の学習を支えていることです。様々な領域で研究を進めているスタッフが、それぞれの専門領域の垣根を越えて、近年の重要課題の解決過程への参画を目指す新しい授業やカリキュラムを開発しています。

第二は、学部の早い段階から、子どもたちの成長と発達を促す協働的な実践に参加することです。本学部の教員養成カリキュラムにおいては、独自の実践科目群が1年次から位置づいています。協働的に実践し省察するコミュニティに参加すること、また養成段階に特有の実践経験を積むことによって、協働で実践する状況の中で省察し学び続けると同時に、より切実さをもって必要な学識を形成していくこととなります。

第三は、先輩たちが自身の学びの履歴を残し、それを後輩たちに伝えていく世代継承サイクル

を実現していることです。たとえば、教育実習前に大学において行われる先輩の模擬授業に後輩が児童・生徒役として参加する、また、1年次から異学年で様々なチームを作って地域の子供たちと一緒に長期間活動する、さらに、通常の授業においても、1年生から4年生までが異コース異学年のチームを形成し、協働探究を重ね、そこで取り組んだことの意味を多様なメンバーで繰り返し問い直すといったことを行っています。そして、すべての学生が、大学で学んだ成果をまとめ、自身の成長の足跡を残していく「学習個人誌」を作成し広く共有しています。この学習個人誌は後輩たちが読み、協働探究の成果や経験が後の世代に受け継がれていきます。

● 評価観の転換

福井大学教育学部の教員養成カリキュラムにおいて育まれる能力は、従来の標準化されたペーパーテストに見られるような、個別的な知識や技能の有無をチェックするという方法では評価することができません。

私たちは人間の能力を、複数の知識や技能や態度が組み合わされて状況に応じて発揮されるもの、新しい状況の中で何度も使い直されることによって全体的に習熟されていくもの、そして個人に宿るだけでなく集団の人間関係の中で発揮されるものと捉えています。そして、このような能力は、一人では解決できないような難しい課題に協働で取り組み探究する中で育まれるものであると考えています。

したがって、教師に必要な能力の評価は、第一に、探究を支援する機能を持っている必要があります。一人では解決できないような課題に向かっていく協働的な探究は、試行錯誤し、時には失敗しながら進んでいくものです。しかし、試行錯誤だけでは探究は進んでいきません。大切なことは、要所で自身の学習の過程を振り返り、学び直し、まとめ直し、そしてその意味を問い直すことを通して、次の新たな探究をデザインすることです。評価は探究や学習を促進するための道具であるのはもちろん、評価自体も探究や学習の重要な柱なのです。

このような評価は、第二に、能力が育まれた状況を豊かに表現するものである必要があります。どのような目標に向かう学習なのか。また、どのような状況において、どのような課題に向かい、どのように解決したのか。さらに、どのような環境や集団の中で学習を進めてきたのか。これらの情報が豊かに残された記録は、厳密な体制のもとで行われたテストよりもはるかに能力の育ちを読み手に伝えてくれます。また、能力が育まれた状況そのものを吟味することにもなります。つまり評価は、目標と学習そのものを問い直す道具でもあるのです。私たちは、先に述べた学習個人誌が、まさにこれら評価の二つの機能を担うものであると考えています。

以上のような考えに基づいて、私たちは教員養成を担う学部として本学部独自の教員養成スタンダードを策定しました。いずれのスタンダードも、これからの時代の教師に求められる能力を目標として掲げ、その目標に向かって行われるべき学習経験を保障し、その証拠となる学習成果物を組織するという理念に貫かれています。

福井大学教育学部 教員養成カリキュラムの概要

地域の実践コミュニティに参画しながら省察的に学ぶ

DP 卒業の認定に関する方針（ディプロマ・ポリシー）
教育学部では、大学及び教育学部の教育目的等を踏まえ、教育課程編成の方針に基づいて編成された科目を履修し、共通教育履修規程および教育学部規程において定められた単位の取得を通じて、教科や教職の専門的・実践的力量ならびに地域・社会の求める公教育の担い手としての自覚と責任感を備え、以下のような能力を身につけたと認められる者に対して学位を授与する。

CP 教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー）
【教育課程の編成方針】学校教育課程では、公教育の担い手として多様な人々と協働しながら、学識に支えられた指導力により子どもたちの学習・発達を支援し、生涯にわたって学び続ける教師を育てるために、以下のような特徴を有する教育課程を編成し、実施する。

ディプロマ・ポリシー
卒業の認定に関する方針

1. 生涯にわたって学び続ける基盤
2. 協働的な学習や探究的な学習の指導と評価
3. 教科・領域における重要な概念と探究の方法に関する理解
4. 民主的な集団活動の指導
5. 子どもたちの個性に応じた成長と発達の支援
6. 学識形成の足跡を示す学習成果の公開

カリキュラム・ポリシー
教育課程の編成及び実施に関する方針

1. 幅広い専門領域を担う教員組織と新しいカリキュラム開発
2. 実践と省察を繰り返す協働的な学習
3. 教科・領域の専門性を高めるための科目配置
4. 深い人間理解を促すための科目配置
5. 学び続けることのできる教師の育成

